

1. 本研修を受講して学んだことについて

学生の頃も、美術が好きで、よくルノワールなどの絵を模写していたことを思い出しました。またルーブル美術館に行ったときの建築、作品の素晴らしさが蘇り、とても心を動かされました。幼児期に美術館に触れること、心が動く体験を大事にしたいと感じました。新しくできる鳥取県立美術館の①次世代へ伝えるすぐれた作品収集コレクション②展覧会③作家や作品についての情報収集④作品作家について理解を深める取り組み、教育普及について学ぶことができ、大変よかったです。

47都道府県の一番最後に出来る美術館「鳥取県立美術館」が2025年に開館する。初めてその話を聞いた、1～2年前「へえ～、鳥取に美術館なかったっけ？」という認識しかなかったが、今回この＜基調講演＞を聞かせてもらい、もうすでに着工していることを聞いていかに関心を寄せず、また無頓着であったかということに気付いた。でもそれぐらい鳥取市民にとって美術館というものが、身近なものではない、少し格式高いものという事でもあるように思えた。

しかし、この基調講演を聞かせてもらい美術館の意義や、また子どもたちにとっての美術館の意味や、県民にとっての美術館という意義を考えさせられ、すごく勉強になりました。

また、一つひとつの美術館の作品の収集の仕方、展示の仕方や、建築様式など、美術館の奥深さや個性を感じたり、また作品を知るうえでその年代の生活や、空気感、時代背景を一つの作品から感じ取ることも知った。この講演を聞いて、美術館に行くことがすばらしい美術作品に触れることだけではなく、作品の置かれている美術館という環境自体やその歴史に関心を寄せることで、より楽しむことができることを学び日本最後の「鳥取県立美術館」に大いに期待をし、是非とも我が子と一緒に足を運びたいと感じた。そして、いつの日か自分にも引き込まれるような作品に出合えることを心待ちにしたい。

「あなたの幼い時に神を知りなさい。」講師である尾崎先生は、幼少期に通っていたキリスト教の幼稚園で言われた言葉が今でも印象深く心に刻まれているという。それは、現在仕事として携わっている美術館の学芸員という仕事に通ずるものがあるからというからだ。では、なぜ幼い時に言われた言葉が美術館につながるのか。美術館という場所があることを知り、足を運んでみるのが大切なのか先生の話聞きながら私なりに考えてみた。美術館には、絵画や彫刻など様々な作品が所蔵してある。美しい絵や調度品に触れることで美的感覚を磨くことができる。つまり、直感的に感じる力が身につくということだ。パソコンやネットが普及し、自分が接することのできる情報が膨大な現代の世の中、正しいものと間違っただけのものを見極めることが難しい場面も少なくない。しかし、世の中には、色々な場面で自らが選択をしていかなければならないことが数多く出てくる。直感力を磨くことで、本当に自分に必要な事柄を判断することができるようになるのではないかと思った。先生は美術館に行き、美術品を鑑賞する以外にも、音楽を聴くことや本を読むこと（絵本の読み聞かせ）も同じだとおっしゃっている。それは、作品を見る時、聴くときに正解がないことが共通しているとのことだった。

「作品は見る者、触れる者に対して問いかけるようなことはしない。見る人触れる人によって感じることや考えることは違う」そして、「これらは勉強では身につかないこと」であることを強調しておられた。『勉強では身につかないこと』これは、幼児期に育てたい非認知能力の獲得につながることはないかと感じた。公共の施設を利用する際、大きな声を出さない、静かに滞在することが求められる。つまりは我慢する気持ち、マナーが身につくということである。この体験、経験は後々自己管理能力や規範意識にあたる自制心が身につくことにつながると感じた。また、作品等に触れることで、想像や創造を膨らませる力も身につく。こうしたことは、確かに勉強で身につくものではない。だからこそ、スポンジのように何でも吸収することのできる幼児期に様々な場所へ行き、色々なものを見て感じる、考えることが大切であるということの本研修で学ぶことができたと思う。

絵画や美術品を間近で鑑賞することができるので、美術館が好きです。特に絵画は額も含め題材や色使いに惹かれ、自分の気になったり気に入ったりした作品の前で時間を取って鑑賞しています。自分の感性や解釈で鑑賞することができ心が落ち着いたり、また高揚したりと色々な感情を味わっています。基調講演では美術館の美術品展示の仕方や、外観、所蔵する作品について、また設計を含め、美術館側のねらいや配慮等、色々な方面からお話ししてくださいました。今まで美術館といえば美術品鑑賞が主で、他をあまり意識したことがなく、新鮮な講演でした。倉吉にできる美術館は地域に開かれたスペースもあり、美術館自体を身近に感じながら美術品を鑑賞できる設計となっているとのこと。美術館を身近に感じること、それは美術品への興味により繋がりが、また気軽にいつでも美術品に触れる機会となっていくと思います。子ども達にとっても幼い時から美術館を身近に感じ、マナーを学び、美術品に触れることでより豊かな感性を培ってほしいと思っています。完成がとても待ち遠しいです。

実際に自分も普段の生活の中で美術館はなかなか行くことがない為、生で絵や作品を見たり肌で感じたりする機会がなかった。子どもは、大人が連れて行かなければ美術館という存在を知らない子どもも出てくると思う。保育の中で、子どもたちと一緒に体験してきたことや感じてきたことを絵や製作で表現する活動を行っているが、実際に自分の目で見たり、耳で聞いたり、肌で触れたりしてきたことは一人ひとりの心の中にしっかりと残っていて、保育者や友だちに言葉や身振りで感じたことを伝えながら描いたり作ったりしている。子どもたちに、白い紙を用意し、自分の好きなものを描くように伝えようと、なかなか書き始められなかったり、何を描いたらいいのか分からずに止まってしまったりする子もいれば、しっかりと描きたい物を思い浮かべて描いている子もいる。このことから周りを取り巻く環境がとても大切ではないかと感じる。絵を見る、絵本を読む、身体を動かす、友だちの存在を知る…など、このような機会に触れる環境がなければ子どもたちはそれらを知らないまま大きくなると思う。そして、このような環境は大人や保育者が作っていかねばならないということを学んだ。

倉吉市民である私は、県立美術館が建設されていく過程を身近に感じられる環境にいることに喜びを感じながら基調講演をきかせていただきました。勤務する園の近隣施設に博物館があり、年に数回ですが子どもたちと鑑賞します。生き物や植物など知っているものの作品に出会うと子どもたちの表情が明るくなります。感性が磨かれていく瞬間なのだろうと思います。美術館の機能の中に、教育普及ということが新しく加わっているというお話がありました。自身の幼少期は美術館に行ったことなく美術品といわれるものはテレビで取り上げられるものという感覚でしたので、これから育っていく子どもたちには、そこに行ったら大好きな本がある図書館のように、気に入った作品に出合える美術館といったようにより身近に感じられる施設になってほしいと思います。また、国宝の展示も可能な施設ということでそこも魅力を感じました。世界の様々な美術品に今後巡り合えることが楽しみです。

世界各国の美術館を紹介頂き、非常に興味深く、わくわくしながらお話を聞かせて頂きました。これまでは美術館を利用した際、美術品ばかりに注目していましたが、外観その物もアートである事も知り、今後はもっと様々な視点を持ちながら芸術を楽しみたいと思いました。また、美術館によって建築の工夫や展示方法など、それぞれに理由がある事を知り、意図を考えた上でどのような工夫がされているのか考える事も大切だと感じました。

今まで教育という観点から美術館について考えたことがなかったが、今回の研修を通して幼少期の芸術との関わり大切さについて学ぶことができた。また、世界の美術館についてのお話を聞くことができ、美術館に行きたいという思いが高まったり、より美術館が身近なものであると感じることができたりした。

子どものころに触れたものは価値観に影響する。小さい時から美術館になじむことに大賛成である。美術だけでなく他の様々な事象にも共通する考え方だと思ふ。コレクション型、展示型と美術館にも種類があることを知っているようで知らなかった。歴史的な背景も知ることができ、とても興味深かった。美術館そのものが作品である。いろいろな美術館を見させていただき、解説もしていただいで楽しめた。もっと聞きたいと思った。

小さい頃から美術館を経験してほしいと言われていて、自分の幼少期を思い返すと、夏休み等、長期休みに、展覧会の案内がきていて父に連れて行ってもらったことが思い出されました。たしかに、美術館は親に連れて行ってもらい、または学校の課外活動などで参加する等がないと日常的には行く機会がなかったように思います。学校を卒業してからは、しばらく美術館を訪れる機会がなく自分の中で美術館から遠ざかっていたのが現実です。自分が家庭を持ち一人での時間もなかなか確保できないこともあり、行きたい個展や展示会があっても我慢していました。上の子が小学生に上がり初めての夏休みの今年、久々に美術館へ行きました。子どもと一緒に作品を見て回り久々に楽しむことが出来ました。世界的な美術館のルーブル美術館とニューヨーク近代美術館を紹介しておられ、どちらも、とても魅力的な美術館で憧れです。展示作品もヨーロッパの貴族や王様が収集したコレクションや近代美術をゆっくり鑑賞する機会があればいいなと思いました。建築の外観のどの紹介された美術館も印象的でしたし、どこも行ってみたいと思わせる魅力的なお話ばかりでした。アンチンボルトの《水》という作品は解説もなるほどなと思いましたし、見てみたいです。東京の大原美術館と国立美術館にも出かけてみたいなと思いました。鳥取県立美術館が令和7年に完成予定との事で4つの機能（コレクション・展示・調査研究・教育普及）を上げられており、特に教育普及の部分で美術を通した学びに力をとされており、素晴らしいことだなと思いました。また、広い芝生やエントランスも素敵で放課後訪れたり、お休みの日に出かけたりと、美術館の雰囲気かゆったりと考えられており、ニーズが今まで以上に増え、より良い美術館になるのではないかと期待しています。展示室も2階からとなっており水害を避ける工夫がされていると知らなかったことも学べ、勉強になりました。

わたしは、博物館とか美術館に行くことがあまりありません。それぞれの作品や展示に素晴らしさや物語があることはわかりますが、それをどう理解するのがいいのか分からないから、そこに行くことに興味や関心が湧かないのが正直なところですが、しかし今回のお話で、美術館そのもの、建物や環境にもいろいろと工夫がしてあったり、作品や展示物をみたり、鑑賞したりするだけではない楽しみ方などを知ることができて、もっとカジュアルに「この絵、面白い」「これ、どうなってるのかな」と自分の感じ方で観てもいいんだなとわかりました。また、世界にはどれひとつとして同じ美術館はなく、それぞれの土地柄や環境にも合った施設だということがわかりました。何より、美術館に行くことでマナーやルールを知ることが出来ると話された時には、なるほどと納得できました。絵や作品を見る時の態度や周りへの配慮は、そこに行かないと実際には分からないとわかりました。これこそ、本物に触れる大切な経験だと思いました。

令和7年春にオープンする県立美術館が、どのような美術館になるのかとても楽しみにしていました。講演の中で、新しくできる美術館のイメージ画像や間取り図などを見せていただき、美術館としてのみでなく、地域に開かれたコミュニティースペースとしての役割も兼ねていることがわかりました。“美術・芸術”という踏み込むのに少し敷居が高いような気がしていましたが、美術館という場所が身近なものになり、そこで自然に美術作品を目にしたふれたりできることで、多くの方が美術・芸術に興味や関心をもてる機会になると思いました。尾崎先生が言われた「幼い時に美術館に通いなさい」という言葉を実践するには、身近に美術館があることが先決だと思います。しかし、これまで鳥取県には（特に鳥取市には）美術館がありませんでしたが、今後は倉吉という鳥取県の中央部に位置する場所で、県内の子どもを含めた多くの人々が「美術館に通う」ことができるようになると思うと、とても楽しみにになりました。美術作品を観た子ども達がどんなことを感じ、感想をもつのか、そんな話が聞けるといいなと思います。

本物に触れることが、大切だということは十分わかっているが、「美術館」という場所は、どちらかというところ、他の施設に比べ子どもたちにとって身近ではなく、私たちにとっても気軽に入れる場所にはなっていなかった。美術館の良さ、すばらしさ、そして教育的効果として利用の等、再認識することができた。また、美術品について考えるきっかけになった。

尾崎先生のお話を聞かせていただき、今まで見たこともない美術館を見せていただくなど、世界にはいろいろな美術館があることがわかった。また、それぞれ美術館で外観、内装にも工夫がしてあり作品を見に来る方への思いが詰まった建物になっていることを感じた。鳥取県立博物館の作成にあたって、たくさんの方に作品を見ていただきたい、美術について考えてほしい、学んでほしい、ステキな気持ちを感じてほしいというような制作者のみなさんの努力や工夫があることを知りました。完成後は、ステキな作品が飾られるということなので、本物の美術に触れるなかで特別な瞬間、ステキな刺激がいただけることを楽しみにしています。

近年、スマートフォンやパソコン等を通してメディアがさらに展開・発展していく中で、子どもたちに美術や音楽、読書等「実物」に触れさせることの大切さを学ぶことが出来た。幼い頃に美術館に行く、または作品や絵画に触れることで、その中でのマナーが身につくこと、そして作品を見る上で正しい見方はなく、1枚の絵を見て考えることは人それぞれ違うということを知り、様々な文化に触れさせてあげる機会をもつことを大人は与えていくべきなのだと感じた。

保育学生時代、美術館に行く授業が多かったり、「たくさん美術館に行って豊かな感性を育みなさい」と言っていたりした意味を改めて思い出し、考えながら講演を聞きました。美術をみるという経験をつむことで感性がうまれること、幼い時に美術館を覚えることが大切だということを知りました。また、美術館の4つの機能コレクション・展示・調査研究・教育普及について知ることができ、今後美術館に行く際に色々な視点から鑑賞したり考えたりしたりしたいと思います。

美術館を創る仕事に携わっておられる方のお話を聞いたり、完成する前の施設について映像を見させていただく機会は滅多にないこともあり、貴重な機会となった。また、美術館が担っている役割についても考えさせられる機会となった。県立美術館については、完成を楽しみにし、ぜひ訪れたいと思っている。美術館というと、作品を鑑賞する場であるというイメージがまず思い浮かぶが、もっと多くの人が様々な形で利用できる、まさに“未来をつくる美術館”としての役割を果たす場ということで、これからの時代にふさわしい美術館は、その担う役割ももっと幅広く、重要なものとなっていくことを実感した。地域の文化・国内外の幅広い文化に触れることで、視野を広げ感性を養うのはもちろんのこと、もっと様々な利用の仕方ができ、気軽に訪れることができる場所・アートを通して人とつながれる場所として、このような施設が地元にあるということはいずれのことであり、地域のすばらしさを再確認することにもつながるのではないと思う。

2. 実践に活かしたいこと

作品を見た人が自分で疑問を持ち答えを探すことで、想像力、創造性の能力の向上や、他者理解の深まり、自己肯定感の高まりなどに効果が得られていく「美術を通じた学び」につながっているのだと学んだ。

幼少期に美術館に行く経験を積むことで、来館した時走ったり触ったり大声を出したり他の人の迷惑になる事をしない等、館内や作品を見る時のマナーを身に付けていくだけではなく、本物と触れ合うことにより、絵画の持つパワーを感じたり様々な視点をもって、より楽しんで感性を引き出せたらと思う。

美術館を訪れて感じた事を子どもたちと共有し、保護者にも発信していくことで子どもたちの生活に芸術が隣り合わせの環境づくりをしていき、子どもたちが豊かな育ちをしていくために様々な経験ができる環境を作っていくことを大切にしていきたい。

子どもたちはたくさん経験や体験を通じ感性を磨いていく事の中で、有名画家を題材にした絵本もあり、図録自体を絵本のように子どもに見せて自由に話し合うことも美術に興味をもつきっかけになるのではないと思う。そして、子どもには自由に描かせることや上手下手というような評価をしないことは大事だなと思った。

保育者自身ももっと美術館に足を運んで自分の目で色々と感じ感性を磨き心に栄養を増やしていきたいと思った。そして、保護者の方にも推進したり、子どもたちにも見せたり話したりしていきたい。

幼少期こそ美術館にいき、芸術作品に触れる経験をする事で、表現の仕方や楽しさを学ぶことができると感じた。また、普段から子どもたち一人ひとりの表現方法を認め固定観念や先入観にとらわれず、みんなちがってみんないいんだという考えで行きたいと思った。そして、一人ひとりがしっかりとびのびと表現する楽しさが味わえるような環境作りが大切だと改めて考えさせられた。

園から美術館に向き美術館を身近に感じる環境を作っていきたい。美術館にはいろいろな空間があり、完成したら1階エントランスおよび前面の広場などへ遠足に出かけたり園児も参加できるワークショップなどがあれば楽しめたり良い経験なのではないかと思う。

子どもたちの考え方・感性・表現の仕方にはそれぞれ個性があることを再認識する中、子どもたちの感じたものを受け止め、感受性が豊かになるようにサポートしていきたい。そして、園でも子どもたちと絵を描いたり作品を作ったりしていきたいと思う。

美術館の展示方法について知り、保育の環境構成に応用できる点があると感じた。保育で子どもたちに提供する教材や部屋の壁面の貼り方でも教材研究をして見せ方、考え方を工夫していきたい。

子どもたちは造形や描画活動で多くのコミュニケーションをとることが出来ていて、自分の作品だけでなく、他の子どもの作品にも触れ、友だちの良さや表現方法に気付くことができるような活動を行いたいと思う。

美術館では作品そのものだけでなく、展示されている環境を含めて大切にされている事がわかった。園生活の中で美術館についての話をしてみたり会話を広げたりしながら、より興味をもたせ行ってみたいという気持ちを養い、幼児期に様々なものに触れることによって子どもの感性を磨いていきたい。

保育の中で子どもたちと絵の話をしたり、美術館という場所がある事を伝えたりして、子どもたちの興味関心を引き出していきたい。そして、造形、音楽、自然など子どもの学びにつながる場を大切にしたい。

小さい時からいろいろな場や物に自然な形で抵抗なく触れたり興味や関心が広がっていったりして、子どもたちに豊かな感性が育まれることのお手伝いをしていきたい。豊かな感性を身につけるといことはその人の人生を豊かにする。そのためにも、幼児期に様々なものを見たり聞いたり触れたりする機会を意図的に作り体験できる環境作りをしていきたい。

絵本の読み聞かせで作家の方の絵に触れる機会があるが、絵本以外の絵画に触れる機会があまりない。保育空間に画集を置いてみたり、ポストカードに触ってみたりするなどいろいろな絵画に触れる機会を作ってみよう。

子どもたちの保育に当たるとき、作品を作ったり遊びの中でお絵描きをしたりする中でも想像力や創造性が豊かになるような声掛けや関わりができるよう心掛けていきたいと思った。また、子どもの性格や思いや感じ方も人それぞれ、保育にも正解はないよと改めて感じた。

子どもたちの取り巻く環境を豊かにできると思うので、保育者自らがその体験をし、幼な子の人的環境として高め合えたらいいと思う。そして、より豊かな感性や視野をもつことで子どもたちの取り巻く環境を豊かにできると思う。

保育者が作家や作品、美術館等について勉強し知識を深めることで、保育を通して子どもたちに伝えられることもあるのではないか。できれば本物の美術品を子どもたちと観に行く機会を作り、観たり触れたりできるようにしていきたい。

普段の保育で感性を育てておく必要があり、いろいろな素材や物、絵本や歌など様々な事に触れておくこと、思いを受け止め共感していくことで、ものの不思議さや美しさなどを感じる心を育てていけるよう心掛けていきたい。